

7月9日の日曜日、この日の空はまさに晴天。梅雨が明けていないなんて信じられないぐらい暑く、眩しい日。

空を見ていつも思う。卓上で起こることは天気似ていると。熟練者であれば晴れも雨もある程度の予測はできるが、最後は人の手が届かないところで決するものがある。今日は卓上はどんな天気になるのだろうか？

大塚にある麻雀スタジオで女性向けのオープン大会である「ミューレディースオープン」の決勝大会が開催された。会場では予選大会を勝ち抜いた36名の選手が牌を握っていた。女性ばかりの会場。何とも華やかである。9回目を迎える今大会は昨年度から予選大会は二日間に渡って開かれ、なんと今年は120名以上もの参加者がいたようだ。

前年度のチャンピオンは日本プロ麻雀協会所属で現女流雀王である朝倉ゆかり選手。女流トップクラスの彼女が優勝したことでますます注目度が上がっているのであろう。

そんな激戦から飛び出した決勝面子は全員が競技麻雀団体所属者となった。

まずは首位から日本プロ麻雀協会所属の水瀬千尋選手。

麻雀歴は7年。デビュー直後から関西女流スプリント優勝、第7期夕刊フジ杯個人戦優勝と立て続けにタイトルを獲得している。その勝負強さが一目置かれているが、彼女のプロ意識は麻雀以外の部分でも際立つ。それは「ファンサービス」である。放送対局ではいつも衣装にも気を配り、華やかさを演出している。実力と人気を兼ね備えた彼女はこの決勝でどんな麻雀で魅せるのか。

続いて日本プロ麻雀協会所属の大崎初音選手。

麻雀プロで彼女の名を知らぬ者はいないであろう。女流雀王を三期獲得し、その他にも数多くの優勝経験がある。雀風は門前型で「リーチを愛するひまわり」とも呼ばれている。その通り名が表すようにここぞと言う時のリーチでの破壊力は抜群である。麻雀教室で講師も務める彼女は、まさしくお手本のような麻雀を打つ。冒頭のインタビューで「決勝に残る度にこれが人生最後の決勝かもしれないと思っていて、今日も最後かもしれないと思ってるので精一杯頑張ります」と述べた。この全身全霊さが今日の結果に繋がっているのだろう。

そして101競技連盟所属の菊池智江選手。

なんとこちらは麻雀歴が33年と言う大ベテランである。その時の長さを思うだけで、いかに彼女が麻雀を愛してきたのかが伝わってくる。決勝経験も豊富で、ミューカップの決勝や

女流名人戦の舞台で闘ってきている。決勝含む3半荘連続の放送卓で彼女の麻雀を観戦したが、守備に優れ、その上で時には力強く押し進めるその様は圧巻であった。

「死ぬ気で頑張ります」と簡潔ながら重みのある言葉はまさにここまでの生き様を表しているのだろう。

最後はRMU所属の小宮悠選手。

4人の中では1番競技歴が浅く、団体に所属してからまだ2年目のルーキーである。しかしながら競技をするために故郷を飛び出して上京してきたほど熱意に溢れ、勉強会にも積極的に参加している。その甲斐があって昨年初参戦した2016年度のティアラリーグで決勝に進出し第4位。4月に行われたスリアロチャンピオンシップでも優勝するなど目覚ましい活躍ぶりである。冒頭のインタビューでは少し緊張が残る表情で「自分の麻雀を打ってトップを取りたい」と告げた。

それぞれが決勝に持ち越しているポイントは以下の通り。

水瀬 +73.7

大崎 +67.3


菊池 +63.4

小宮 +60.4

トップの水瀬から4位の小宮まで13.3ポイントと接戦である。水瀬と大崎はトップであれば文句無しの優勝。菊池と小宮も若干の並びや素点差は必要ではあるが、トップを取ればほぼ優勝というポジションである。


決勝の座順は起家から小宮、南家・菊池、西家・水瀬、北家・大崎で開幕となった。

まだ卓について間も無いこの瞬間から女の火花が散ることとなる。

東1局、親小宮、ドラ 


まずは親の小宮が早々に動いた。

        南 西 北

筒子が高くなったこの局面で聴牌打牌のをそっと置き、黙聴を選択した。


この大崎の切り出しは、同じ卓上にいる菊池と水瀬にも強く映っていただろう。
今度は9巡目に西家の水瀬がイニシアチブを取りに動いた。



ここからをチーして喰い変えをしてタンヤオに向かっていく。他家のスピード感を察し門前では間に合わない判断したのだろうか。 μ の大会は今回が初めてだと言うが、ルールを上手く利用して捌きに出た。
水瀬もまた実戦的な判断に優れた打ち手であり、決勝の舞台は何度も経験している。この対応力が彼女の強みなのであろう。

この仕掛けを見て大崎が遂に不要牌をツモ切り「リーチ」と声を出す。タンヤオで捌きにきた水瀬にもう一牌も自由に打たせないということだろうか。

親の小宮と水瀬も懸命にイーシャンテンで粘る。

しかし軍配は大崎に。を静かに引き寄せ3000-6000の大きなアガリをものにした。

この華々しいアガリの陰で手が入らなかったのは菊池である。形を崩さずに、なおかつ親へ鳴かせないようにと慎重に手を進めていた彼女は、常に周りに気を配るその姿勢が競技麻雀の造詣が深いことを表していた。


東1局から各者の思考がぶつかり合い、非常に見応えのある局となった。
1歩リードした大崎に三者はどのように食らいついていくのか――？



続く東2局。この局は菊池らしい選択が見られた。


親菊池、6巡目、ドラ








この局はまさに菊池の局であったが、その背後では水瀬が素晴らしいテンパイを組んでいた。



まず9巡目に  をツモって以下の牌姿。

 ツモ 

ドラの無いこの手牌。大崎がハネ満をツモあがって点数差がある状態ではここは789の三色に仕上げたい。形が苦しいのは重々承知の上でこの  をツモ切りとした。

直後にドラの  をツモ。今度はドラを引いて、三色かドラを使い切るために打 。

そこで親の菊池から仕掛けが入り、12巡目に  を引いてカン  のテンパイに取ることが出来る。しかし水瀬はこのテンパイに価値はないと見て、親の現物でもある  をツモ切る。

そして遂に14巡目に三色が完成する  をツモり打  とし、見事ドラ単騎の三色ドラドラに仕上げた。望むテンパイ形ではないとはいえ、12巡目にあの選択に踏み切れるとは、なんと強靱な精神力なのか。

ここまでたったの2局である。正直こんなに濃い展開では何万文字あっても書ききれないと私は青ざめてしまった。しかし抜群に面白い。
今回の私は解説兼、観戦記者としてこの対局に関わっているが最早麻雀を愛する一ファンとして今後の展開を伝えていこうと思う。
それぐらい白熱して気持ちが入ってしまう対局なのだ。まだまだ続く長文にはご容赦願いたい。


続く東2局その2は、水瀬・大崎の2人テンパイで流局し、東3局で親番を迎えた水瀬が爆発する。

親水瀬、ドラ



一萬 一萬 六萬 七萬 八萬 四四 五五 六六 七七 八八 九九 東 東

7巡目にダブ東とのシャンポンをリーチして、すぐに高目の東をツモり 3900 オールのツモアガリ。一撃でトップ目に踊り出ることになった。



東3局その2は水瀬と菊池の2人テンパイで流局。
東3局その3で今度は追う立場となった大崎にチャンスが訪れる。

親水瀬、ドラ 




四萬 伍萬 伍萬 七萬 七萬









二巡目にこの形。萬子と筒子の連続形を重視してここから打。すぐにを引いて早々にイーシャンテン。



ここで場に動きが出る。北家の菊池が^④をポン。捨牌を見ると筒子の混一色に向かったように見える。他家もこれに対応しているのか急激に場に筒子が高くなった。

そのさなかに大崎はドラの  を引き目一杯のイーシャンテンから、8巡目に  を引いて以下の牌姿になった。

伍萬 伍萬 伍萬 七萬 七萬

形だけで見れば  の三面張に固定する打  という選択もあるだろうが、切られた牌は  だった。

場を見てみればなるほど、表示牌と合わせて  が3枚見えてしまっている。筒子は3巡目に水瀬が切った  しか見えておらず、異様な場になっていた。こうなると    も信頼できない。そして親の水瀬が生牌の  を切り出してきていることから真っ直ぐアガリにきていて、それなりの手が入っているのだろう。それならば   受けの価値が低く、ドラはもう切らない。

打  の思考を探っているうちに、次巡ツモがなんと望外の 。ツモり三暗刻までつく最終形に仕上がった。

二萬 四萬 六萬 七萬 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ツモ ⑰

引かされた牌は4枚目の ⑰ だった。カンチャン残りで勝負するのは分が悪いと現物の

⑱ ⑲ を切って回っていく。だからと言ってやすやすと手は崩さない。その甲斐あって上手

く粘ることができた。残りツモ1回で ⑰ を切ればテンパイまでこぎつけた。

六萬 七萬 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯

ピンフ高め三色。問題は ⑰ を勝負するかどうか。この時水瀬はリーチ直前の大崎の手出し

⑱ を見ていた。「大崎さんが ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ と持っていたら早々に ⑱ を切っているはずなの

で、ここでの ⑱ 切りはドラ対子を固定したと読んだ」と後日自身のSNSに掲載された自戦記の中で綴っていた。ここは勝負してテンパイを取る。

そして結果は2人テンパイで流局。

大崎からすると勝負手がアガれないだけでは無く、親番を流すことすらできないのはかなり苦しい展開である。


しかし勝利を手にするというのはいつも苦しみがあって当然なのである。そのことを最も良く知っている彼女。

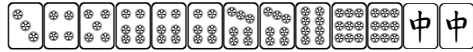
東3局その4


またしても7巡目に先制で手が入ったのは大崎。ピンフドラ1のテンパイ。何度だって「リーチ！」と声を出してぶつけていく。









かと言っていつだって前を見て、捨て身でぶつかっていくのは水瀬も同じであった。






多少の点棒のリードでは手を歪めない。このリーチにまたしても無筋を通していき、大物手のテンパイを組む。

親に水瀬、ドラ 




混一色一盃口ドラドラ。ここで12巡目に持ってきた牌は 。

テンパイを維持するなら  ツモ切りでカン  か、 を切ってどちらも生牌の  とドラの  のシャンポン待ち。(一応ドラの  を切って中ぶくれ  と  のシャンポン待ちと言う選択もあるがこれはあまり現実的ではないだろう)

この時捨牌と合わせて   は6枚見えで    も6枚見え。通った筋も増え、筒子での命中確率が上がっていた。この状況と合わせて自分の待ちが苦しいのであれば、ここは一度やり直して勝負できるテンパイにするんだと考えたのだろうか。

中の対子に手をかけ、回っていった。次に筒子の何を引いても再び復活することができる。あくまで押し返していくための選択だったのだろうと感じる一打。

水瀬がそんな選択を迫られている間にラス目の小宮も手が育ち、タンピン形のくつつきのイーシャンテンまでできていた。そこで打ち出された  にロンの声がかかり、大崎が3900点の加点となった。

今度こそアガリを手にして、今度は大崎が親番を迎える。この親番を迎えるまでに既に一時間。緊張の連続でクラクラしそうな半荘。筆者の手も腱鞘炎になりそうである。

ようやく一息つけるかと思ったその刹那、「やられたらやり返す」と少し前に流行ったそんなフレーズが聞こえてきそうなアガリが。この局は菊池が役々ドラ1の聴牌を入れたのだが、水瀬がタンヤオの1600点で局を流したのである。


重苦しい空気の中でようやく南入。長い長い半荘。

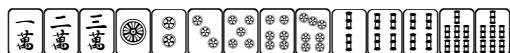
この時点での持ち点はそれぞれ 水瀬464、大崎406、菊池213、小宮117。
水瀬と大崎のテンパイ・アガリ合戦ばかりが派手に映るが、小宮と菊池も恵まれぬ牌勢と、先手が取れずに後手に回されてしまう苦しい展開の中懸命に闘っていた。


そんなラス目の小宮に最後の親番が回ってきた。







絶対に落とせない親番。何としてもここで大きく加点したいところだ。









南1局その2。8巡目に小宮にチャンスが訪れる。





親小宮、ドラ 

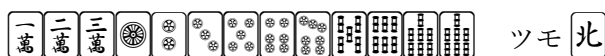



一手変わりで1 2 3の三色に変わるこの形を  を切ってダマテンとした。



 と  は既に場に二枚ずつ出ていたが、明らかに菊池と水瀬の2名は    を持っていないと思われ、枚数上は苦しいとは言え残りが山にいそうであれば三色への振り替わりと、ひょっこり  ツモを期待したものであったろうか。

そして次のツモが 。ここで少考が入り、     の形からなんと打  としてテンパイを外す。両面候補ができたので今度はピンフと三色の両天秤で組み直すことができると考えたのであろう。 をツモったとしてもフリテンで高め三色とできるのでロスはない。

全ての手役を追うテンパイ外しであったが、ツモは思うように効いてくれず  をツモリ、巡目との折り合いもあって   のフリテンのテンパイを取り、そして後に引いてきた牌が  。



この時北家の大崎が萬子の混一色が濃厚であり、この  は生牌。更に萬子が余り始めてい




る局面。ここは冷静に  を切って  単騎ダマテンで進めていく。








点棒の無い親番ではそれでも我武者羅にリーチを打つと言う考え方もあるだろうが、彼女はこの局面でまだ自分の読みを信じて我慢をすることができるのだ。

では実際そのときの大崎の手牌はどのようなものだったかというと

1 2 巡目 北家



           

やはり混一色でテンパイが入っていたのである。混一色一盃口のカン  待ちだが、 は3枚見えてしまっている。字風の  をポンして待ち変えしたいところ。

1 4 巡目に遂に小宮に勝負できるツモがきた。ドラの  を引いてピンフドラドラ。これならばと生牌の  と河に置く。これを大崎がポンして、打  で    に待ちを変えた。大崎にとっても 5200 点の大きなテンパイ。親が押してきたことは重々承知の上で山をめくっていく。そして 1 6 巡目に  を掴み、小宮が大崎から 5800 点の出アガリとなった。

最後までダマテンで押し通した小宮の選択。山にいるかどうか分からない待ちとは心中できない。「自分の麻雀を打つ」そんな明確な意思で紡いだアガリだった。


小宮の親が更に続く。


南 1 局その 3 ではトップ目の水瀬が中の暗刻を生かして仕掛けていき、1 0 巡目に   で 2000 点の両面テンパイをいれる。これに対して上家の菊池が持ち前の守備力を見せつける。

実は誰よりも先にテンパイを入れていたのは菊池であった。

6 巡目・南家・ドラ



前局の小宮と同じように、菊池も一手変わり三色の手でこれをダマテンとしていた。そこに
加えて下家の水瀬の仕掛け。このアタリ牌  がすぐさま菊池に送り込まれたが、ここは

 切ってテンパイを崩していく。

菊池にとってトップ目の水瀬がアガリ、局を消化されるは最も喜ばしくない。親にアガリがある分にはまだマシ、そうしてチャンスを増やして自分の大きな加点に繋がりたいといった状況である。ここは固く手を閉ざしていく。

この菊池の隠れたファインプレーで、親の小宮がピンフ高め一盃口で追いつきリーチを打つ。水瀬がさばきに來た今、先ほどの本手だった大崎の時とは訳が違う。リーチと告げれば水瀬をおろすことができるかもしれないのだ。結果として 1300 オールのツモアガリとなった。

まさに全員が今の点数状況による自分の役割を感じて打ち回しているように見えた。

こうして上位陣 2 人に対して必死に小宮と菊池が食らいついていく。

小宮はとにかく連荘して点数を稼ぎ、菊池は自身の手を組みながら上位陣に絞り隙を与えない。まだ追う立場の大崎は打点力で押し返し、水瀬はその猛攻をかいくぐって自力でかわさなければならない。

そんな激しい攻防が続く中で南 1 局その 4 で水瀬の捌き手が成就して小宮の親が落ちた。続く菊池の親番では大崎がサッとアガリを決めた。

何故勝者は常に一人なのか。深い洞察力と、堅実な守備が光る菊池。ときには迷いながらも全力でぶつかっていく小宮。結果として大きな和了には繋がらなかったが、それはいつだって紙一重なのである。半荘 1 回きりの勝負、どこで誰が入れ替わっても決しておかしくはない。

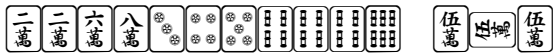
決勝戦を観るときはいつも楽しい気持ちと悲しい気持ちが織り混ざっている。だが苦しみがあるからこそ輝くものがある。

そして遂にこの長い闘いに終わりを告げるときがきた。

の水瀬の捨牌にある 単騎。


「リーチ！」。一体この日何回この声を聞いたのだろうか。いつだって自分の手牌を信じ身を委ねてきた。強くリーチを打ち続けるその姿こそが、競技者としての大崎初音なのであろう。


このリーチを受け、水瀬も追いついた。




無筋の を勝負すればテンパイを取ることができる。しかしどうする？

自分の待ち  は場に一枚出ている。大崎の捨牌に索子はリーチ後の  一枚しか切られ

ておらず、の両面落としが入っているものの字牌から切り出していることもあって

七対子にはとても限定できないのだ。面子手を前提に考えると、この  は相当な危険牌に見えてくる。

例えばツモられたとしても裏の無いこのルールでは打点はまだわからないので次局勝負になる可能性は充分にあるし、オリるとするなら  の3枚を持っている。

弱気の虫が鳴き出すと、こんな風に考えて手が止まっていまいそうだった。

だけどやっぱり水瀬は違う。𠄎𠄎𠄎𠄎を躊躇なく切った。

「ここで勝負しないと次なんてないよ。」そう言いたげな迷いのない一打だった。

この時点でお互いの待ちはそれぞれ山に 2 枚ずつでどちらが掴んでもツモ切る牌。
もつれにもつれた最後の勝負になって、これ以上ないぐらい同等のめくり合いとなった。
後はどちらが先に山にいるか？もう誰にも結果はわからない。
この道の先は晴れなのか、雨なのか。

大崎が山に手を伸ばす。

「ロン」

そう声を発したのは水瀬だった。

水瀬の優勝が決まった瞬間にカメラが対局室を映した。

そこには思いがけない笑顔があった。大崎も、菊池も、小宮も微笑んでいたのだ。優勝者以外は悔しい思いがあるに違いない。しかしその空気は温かかった。

勝負はあくまで卓上のものであり、決着が着けば勝者を祝う。なんて立派な心持ちなのだろう。ここ空気感は女性大会ならではのようと思う。力強く・繊細に・華やかに。

初出場でみごと初優勝を飾った水瀬千尋選手。

デビュー直後から花道をまっすぐに駆け抜けていく彼女はこれからもきっとその麻雀とキャラクターでファンを魅了し続けるのだろう。

トロフィーを抱えるその姿は、いつまでも笑っていて欲しい。そんな気持ちにさせる晴れやかな笑顔だった。

全てが終わり会場の外に出ると、日はすっかり暮れて星が控えめに輝いていた。

この星空も明日になればその姿を現すのかは誰にも分からない。

だからこそ追い求めてしまうのだろう。一瞬一瞬の輝きを逃さず、記憶していきたい。

最後になりましたが、決勝卓の皆様、素晴らしい対局をありがとうございました。

何よりここまで読んでくださった皆様ありがとうございました。拙い文章ではありますが、卓上の景色を伝えられていたら幸いです。

来年はどんな対局になり、誰が優勝するのか楽しみです！次は私も観てもらえる側になるように頑張ります！レディースオープンの益々の発展を願っています。